

乃木坂スクール レポート

「精神の病」の妙薬としての「近所のおじさん、おばさん」

第7回 木原 孝久先生

島本 禎子

娘が精神障害を天から与えられた！という気持ちで半分わけのわからないまま家族会に入会、所属して早25年ほどになる私です。人口50万余りの杉並区ですが（統計的に病の数は1%と言われている中）家族会の会員数はいろんな理由で出入りが年に1割位はありながら、この10年ほどは数合わせをしているかのごとく110名程の一定数での活動継続です。

偏見が多く、回復見込みのない大変な病と叫ばれながらも、最近では、新薬登場、社会での取り上げる回数が増していること、早期介入などで軽い症状のまま元の生活もしくは家族での再生を果たされて、家族会に留まる必要がないという方も出ています。

退会する理由の第一がそれであったら喜ばしいのですが、しかし現実はそのような例は非常に少ないのです。

家族会にたどりつき「苦しいのは自分たちだけでなかった」と孤立から救われ、共感し合い、悩める息子や娘（兄弟、親の場合も）への家族としての対応術などもそれなりに学習する機会を設けたり、その会の意義や姿勢は設立以来不変です。

一方、社会制度の変遷と相まって病そのものの捉え方も変化し、今、薬・医療の重要さは言うまでもないままですが、当事者・家族のおかれる環境もその障害を大きく左右する点として考慮される時代に入ってきました。慢性期に入り、通院以外になす手がなく、作業所等に通う気力もなく、家族内だけで、時折襲う大波に孤軍奮闘する日本人らしき、けなげな我慢強さ、ご近所に少しでもわからないようにこの急場を乗り越えたい、と親子共にもがく姿は、荒れ狂う大海の小舟のようです。

「いざの時に頼れる人は、やはり誰もいない！」というやるせなさ、病への恨み、こうした感情でその当事者の環境が改善されていると誰が言えるのでしょうか？！

前置きが長くなってしまいました。

この日の木原先生のお話しは、今私が家族会でまさしく直面している課題がちりばめられているものでした。

人はどのように助け合っているのか、助け合って行ったらよいのか？

認知症のご家族を抱える場合と問題点の重なる部分の大きいことは勿論ですが、年齢の問題で精神疾患・精神障害者の場合は微妙です。

緊急の時に家族だけで七転八倒しなくてよいように、第三者が駆けつける。そうすれば、緊迫した家族の気持ちに少しばかり余裕が生まれ、風を通し、問題も深みに入らずに最悪の

事態は避けられるのでは？

事態がひっ迫していない場合でも 親しか関わる人がいないという環境の当事者に、私たちが訪問して少しでも会えたら何かが変わってくるのは？？と
そんなお節介訪問を企て動き出して1年足らずなのですが・・・。

しかし開店休業ともいえるありさまが続きます。

声をかけても「家で他人様に会うなど本人が一番いやがることですので」「勝手に他人を家に入れた、と後で本人から怒られて事態が悪化する可能性が怖いので」「家は汚れているので恥ずかしいので、親の私が外で会っていただけますか？」

ほとんどがこのような事でのその人の住む場所(家)への訪問は一度も叶っていません。

「本人には会えなくてもまずは親御さんに」「家に入らずともお近くの公園か喫茶店で」と接点を作ることを優先して、お母さんと外で会い、家族の心にたまっている問題を伺い同じ立場として(少しばかり長いという意味で先輩として)2時間ほど。そのやり方だけでも回数を重ねていくとお母さんの表情が変わって来て息子さん達への対応に変化がみられます。家族での会話が以前より楽そうになっています。

開店休業同様状態の私たちのささやかな最近の笑顔の元です。

私はこうしたことから次のようなことの実現を夢見ます。

精神疾患の患者はある段階でクリニックか病院につながる場合がほとんどです。そこで繋がるのが医師や所属するワーカー等。そしてその繋がりの方は医療機関内、もしくはその従事の範囲内でその名目や目的でしか行われません。

そうした医療等とは関係のないご近所の第三者数名が、その初期からお節介と称して家族や当事者に接点を持ち常にその家に入出入り出来るようにする、拒否をする人は致し方ない。でも診断により処方される薬を服用するのと同じくらいに、本人や家族の今後歩む道は社会の豊かな人間関係によってこそ“支援されている”という安心感に満ち、リカバリー(回復)に舵を切り前進できるようになるのではないのでしょうか。

「精神の病」という診断で驚愕し、落胆し、更に人間関係を細らせる傾向に走るのに まずはストップをかけたい。この病について理解のある友人、近所のおじさんおばさん的な人の介入を初期からその闘病の効果ある別の妙薬として介在させる仕組みがあったら・・・今多くの当事者・家族の抱える問題は激減するのではないかと、木原先生のお話を伺ってからますますその気持ちを強めています。

PS：あなたの「おつき合い」の流儀は？の ○×アンケート持ち歩いてあちこちで楽しんでいます(?)。訪問支援推進者でも○が多いのに、日本人の気質、現実を感じお互いに笑ってしまいます。